ある世界からの使者

0

人はかつて、神々を信仰し、共存していた。
しかし今日では、神々は忘れ去られた存在となった。そんな神々は人に何を伝えたかったのか。

1

暑い夏のある日、僕は神社に来ていた。
「暑い。暑すぎる。こんな暑い日にわざわざここまで来るものじゃないな」
僕は目的があってここまで来たわけじゃなく、ただの気まぐれでここに来ただけだった。

参拝が終わり帰ろうとした時、本殿の横に一匹の動物がいた。
狐だ。
そして驚いたのが顔に神札、いわゆる御札が貼ってあったことだ。
「何か書いてある」
一瞬何が書いてあるか分からなかったが、すぐに分かった。
「これは日本語に限りなく近いけど、日本語ではない」
そう確信しながらも少し困惑していると、その狐が僕に近寄ってきた。
「ついてきて」
そう言いたそうに背中を向け、こっちを見てきた。
「巣でもあるのかな。どうせ暇だし、ついて行ってみるか」
そう思い、狐の後について行った。狐は僕のペースに合わせてゆっくり進んでくれた。

かれこれ十五分以上は歩いた。茂みから雑木林、そして森の奥深くまで来た。
「さすがに疲れたし、そろそろ戻るか」
そう思って顔を上げた時、数十メートル先にあるものが見えた。

近づいて確認してみるとそれは古い木の看板だった。
奇妙なことにその看板にもこの狐の御札と同じ言語と思われる文字が書かれていた。
「巣でもあるかと思って来てみれば、ただの看板とは。帰ろう」
そう拍子抜けしながら来た道を振り返ってみると、さっきまでは無かったはずの石畳の道があり、更には鳥居が何本も連なっていた。

とりあえず来た道を戻ろうとすると
「待って」
と声がした。

声のした方を見てみると、そこには十二単を着た女性が悠悠と立っていた。その女性は顔に御札をつけていた。
さっきの狐がつけていたのと同じものだ。

「これを」
彼女は僕に近づき一枚の御札を持たせた。それは高級な和紙で、さっきまでいた神社の地図と、ここの場所が印として描かれていた。
僕はそれを懐に入れ、彼女にいくつか質問をした。
「この御札は？」
「それはこの世界と貴方の世界を行き来するための切符のようなものです」
「この世界って、ここは何処なの？」
「ここは生の世界、いわゆる”この世”ではなく、死の世界”あの世”と呼ばれる世界でもありません。ここは生と死が混ざった世界で、”生と死”二つの状態が同時に存在しています。この世界の住人は日本の神様たちで、私はその遣いです」
「その世界に僕が入っても大丈夫なの？」
「それを決めるのは貴方自身です。貴方が貴方の世界に戻った時に“何をするか”が大事なのです」
彼女は僕の質問に淡々と、詰まることなく答えていった。

そして彼女は
「こちらへ」
そう言って僕をある場所へ案内した。

2

着いた場所は人の手が一切入っていない美しい川、壮大な森、大きな山が見える非常に清らかな場所だった。
そして川沿いには小さな古民家が一軒建っていた。
「あれは貴方の家？」
「いいえ、あれは私たちが貴方のために用意した家です。貴方の世界のような家を用意しようと、できる限りの努力はしたのですが“こんくりーと”というものがこの世界にはなくて。申し訳ないです」
と答えた。

そして、その古民家に向かう途中、身体中が傷だらけで汚れている人たちを見た。
川に潜っていく人もいれば、森に入っていく人もいた。
僕は奇妙で仕方なかったので彼女の方を見て、そのことを聞こうとしたら
「あぁ、あれは森の神様や山の神様、川の神様です。そしてあの身体の傷や汚れは人間たちがつけたもので、人間が自然の問題を解決しない限り、あの傷や汚れが取れることはありません」

と彼女は御札の奥で少し悲しそうな顔をしながら言った。

3

古民家に着き、僕は彼女と雑談して夜を過ごした。
「そういえば相当歩いて相当疲れたはずなのに眠くならない、そして何よりお腹が空かない。なんで！？」
「私は人ではないので理屈までは分かりませんが、私が思うに、この世界が“この世”ではないからだと思います」
あまり理解はできなかったが、これに関してはどう考えても仕方ないので、次の話題に移ることにした。
「この世界に来た人は僕が初めてなの？」
「いいえ」
「前の人はどんな人だったの？」
「貴方のような人だった気がします。そしてここに来た目的も同じです。大神様とお話するためです」
「大神様？」
「貴方が明日話す神様です。大神様が何をお話しされるかは私にも分かりません」

4

色々と話しているうちに朝になった。
彼女が大神様のいる山まで案内してくれるそうだ。疲れることもなく、サクサク進むことができた。

山頂に着き、この世界を見回した。少し遠くにうっすらとあの古民家が見えた。
非常に美しい世界で見惚れていると、彼女が
「そろそろ、大神様がここに来ます。私は麓で待っていますね」
付き添ってくれないのかと聞くと
「大神様の声を話しかけている人以外の人が聞くと、耳が潰れてしまうのです」
と答えた。

少し考えていると、彼女は
「では」
と言い残し山を降りていった。

5

しばらく待っていると、空から太陽より眩い光が差し込み、思わず目を瞑ってしまった。
そして目を開けるとそこには強烈な存在感を持った人が浮かんでいた。

その存在感からすぐに
「この人が大神様だ」
と本能的に察した。
存在感に圧倒され、何も喋れずにいると向こうから話しかけてきた。
「君をここに呼び込んだのは人間に警告するためだ。神々たちは人間が自然を汚し、破壊していることで苦しんでいる。それをなんとか人々に伝えてこれ以上自然を汚さないようにしてほしい。そうでなければ私は人間を滅ぼさねばならない、神々のために」
「でも、そんな大きいこと、僕にできるか分かりませんよ」
「大丈夫だ。君ならできる。だから、あの者に遣いをさせ、君をここへ案内させたのだ」
そう言うと大神様は静かに空に消えていった。

僕は言われたことを胸に刻み、僕は山を降りた。

6

僕は麓で待ってくれていた彼女に
「大神様に言われたことを必ず人々に伝え、神様たちを助ける」
と約束した。

すると彼女は
「貴方ならきっと大丈夫です。またこの世界でお話しましょう。その時は、あの看板の前に来て下さい。」
「はい、必ず」
と言い、別れを告げた。
彼女は御札の奥で嬉しそうな顔をした。

7

気づけば僕はあの神社の本殿の前にいた。
家に帰り、彼女にもらった御札を大切にしまい、大神様に言われた事を思い出し、どうしたらいいか必死になって考えた。
「どうするべきなのか」
「何からしたらいいのか」
僕はひたすら考え抜いた。

8

あの出来事から二十三年が経った。
僕は今、環境保護を訴える人として大人数の前で講演をしている。
それも偉い人たちの前で。

僕はここ十年、こうして講演をしたりして生きている。
世界は確実にいい方向に進んでいると実感できるほどになった。
最初の頃は批判が大半で、この業界から追い出されることもあった。
しかし、大神様に言われたことを思い出し、諦めずに活動を続けているうちに、信頼してくれる人や、背中を押してくれる人がゆっくりとだが、次第に増えていき、今僕はここに立っている。
ある日、荷物の整理をしていると、あの御札が出てきた。かなり色褪せていたが、大切にしまっていたおかげでまだ描かれている地図や、あの印もハッキリ分かる。
僕は二十三年ぶりに、あの看板の場所へ行くことにした。

9

看板の前についた。
「来てくれたのですね」
振り返るとあの女性がいた。
そこには二十三年前に見たのと同じ石畳の道と何本も連なった鳥居があった。
そして、あの日一日だけ使った古民家のところまで案内してくれた。

明らかに雰囲気が違った。
かつて傷だらけで汚れていた人たちの身体はとても綺麗になっていた。
それを彼女に確認しようとすると
「はい、貴方のおかげです。私たちは全て見ておりました。大神様も大変喜んでおられましたよ」
と嬉しそうに言った。
「他に僕ができることは？」
「もう十分です、貴方は私たち神々のために動いてくれました。そして世界を良い方向に持っていってくれた。だからもう十分です」
そう言われると僕は、
「またここに来てもいい？」
と聞いた。
「もちろんです！」
そう言われてとても嬉しかった。

そして気づけば僕は神社の本殿の前に居た。
あの時と一緒だ。
「また来るよ！」
そう言った瞬間、とても心地よい風が吹き、どこからか狐の鳴き声がした。

作成年月日　2021/10/11